サル対策のむずかしさ

動物応用科学科 4 年　吉岡愛美

ニホンザルの調査を始めてから、もう 1 年と 8 ヶ月経つ。地元から近い八王子市に野生のサルがいることに未だに違和感がある。野生動物と人間が同場所に存在していることは素晴らしいことである。しかし、農作物被害が頻繁に起き、人と野生動物の共存の均衡が崩れてきている。住み分け出来ればよいのだが、なかなかそういう訳にはいかない。

農村の過疎化が進み、ほとんど高齢者しかいないため畑につねに人がいるということがなくなってしまった。それにより田畑へ野生動物が出没しやすくなり、被害が増えてきたのだ。また、昔の人ほどカキやユズなどの果樹をとりいれなくなったというのも原因の一つである。調査地を周っていると、とり残されたカキの木やユズの木をよく見かける。また、放棄されたクリ林なども所々にある。とらないのであれば切ってしまうべきだと私は思う。本当に農作物被害を減らしたいのであれば、このような思い切りも必要なのではないだろうか。

私はできればサルの被害対策を駆除による被害軽減ではなく電気柵や追い払いなどの非殺的方法を採用するのがよいと思っていた。しかし、現場で調査をするようになってからは、何度も繰り返しの被害を起こす農地依存型のサルは駆除をする必要があるのかもしれないと思うようになった。だが被害対策の効果が高いからといってそればかりやっていてはサルの個体数が減ってしまい保護上問題である。

私が初めに思っていたよりも事情ははるかに複雑でこれという妙案はよくわからなくなってしまった。うまい具合に他の被害対策方法と合わせ、また各市町村にあった対策がとられていけば良いなと思っている。そのため、今農作物被害がどのような状況にあるか調べて、解決の役に立ちたいと思っている。